

2019年度 武雄市立山内東小学校 学校評価結果

1 学校教育目標	2 本年度の重点目標
ふるさと山内を誇りに思う 東っ子の育成	1 できた！ わかった！ みんなが分かる授業づくり(学力向上) 2 あいさつ・返事・はきものそろえの徹底と道徳授業の充実(心の教育) 3 「スポーツチャレンジ」への挑戦(体力向上) 4 地域の人的、物的資源を活用したふるさと学習の推進(郷土愛) 5「働き方改革」の実現に向けた取組
人と出会う、人とかかわる、人とふれあう、 地域と共にある学校をつくる	

評価結果の概要
・基礎基本を身につけさせる指導方法やICTを活用した効果的な授業実践が十分ではない。客観テストや調査結果に直結する指導の質を上げる(学力向上)。
・働き方改革への取り組みが十分ではない。退勤時刻が遅く時間外勤務者が多い。行事の精選、業務や会議の効率化が授業の質の向上に結び付いていない。

●は共通評価項目、○は独自評価項目



3 目標・評価							
① できた！ わかった！ みんなが分かる授業づくり(学力向上)							
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	評価	成果(○) と課題 (●)	R2への改善策 (・)
学校運営	○教職員の資質向上	・授業研究の推進	・特別の教科道徳における授業研究を進め、全員が年1回以上の授業を公開し、研究会を実施する。	・授業の創意工夫のために、職員同士が指導技術を共有できる校内研究を行う。	B	○ミニ研修会をスキルアップ研修会と名付け、毎回一人20分程度で、自分の実践を報告しあった。先生方の実践を聞いたり、それについて意見を出して深め合ったりすることができた。 ●研修のテーマを道徳科の内容に絞らず自由にしていたため、テーマ設定で悩む先生がいた。 ○STUDYNOTE10の研修が役に立った。 ●STUDYNOTE10やe-library、スマイル学習などの利用率が高くなく、積極的な利用を促すことができなかった。 ○5年生に先行的に授業をすること、プログラミング成果発表会に出ることをしてもらった。 ●各学年と話し合いをもってプログラミング学習を計画的に進めることができなかった。	・スキルアップ研修のテーマをどうするかを職員に図る。 ・タブレットの中にどのようなアプリがあるのかを職員に伝える。 ・利用率を上げるではなく、どんな場面で利用できるかについて考え、使ってみようとする時間を設定する必要がある。 ・プログラミング成果発表会に出る必要があれば、夏休みまでの早いうちに、どの学年が担当するか決めないといけない。 ・夏休みの間に、学年と話し合い計画を立てる。それに伴い、夏休みまでに各学年の学習内容を計画する。 ・教育計画の情報教育を更新し、周知徹底する。
	●学力の向上	・基本的な学習習慣の定着と学習内容の確実な定着	・12月の県学習状況調査において、十分達成基準に近づく(0.9以上)。	・学力検査の結果を分析し、児童の実態に合った指導方法、指導形態を考え、個に応じたきめ細かな指導を行う。		○12月調査において、県到達目標1.00に対し、0.9以上であったのは、4年社会(0.92)、5年社会(0.92)、5年理科(0.96)、6年国語(0.94)だった。 ●12月調査では、4年の国語科と算数科、6年の算数科で「要努力」の状況、その他の教科は「おおむね達成」の状況にあり、目標の「十分達成」の状況には届かなかった。学力の二極化についても、生活状況の二極化も加わり、学校だけの指導ではなかなか解消できない状況にある。 ○「花まるタイム」の指導で児童にスキルを身につけさせることができていと回答した職員が82%であった。	・4年生以上の学力向上タイムを設定し、全職員で児童の指導に当たるような時間を持つ。誤答の多かった問題について再度取り組ませたり、類似問題に取り組ませたりすることで、正答率を上げ、児童の自信につなげる。 ・朝の「花まるタイム」は、次年度も今年度と同じ形式で継続し、保護者や地域の力を借りながら、児童の学習に対する関心意欲の高まりにつながる取り組みを工夫していく。 ・児童が安心して学び合える集団作りを全職員で取り組む。また学びの土台となるより良い生活習慣が身につくように家庭や地域との連携を図る。
教育活動			・正答率分布の二極化傾向を解消。	・朝の時間の「花まるタイム」を効果的に活用し、「音読」「図形」「計算」「視写」の4つを軸に、児童にスキルを身に付けさせる。児童をリズムとテンポで巻き込み、教師の指導力を向上させる。	B	○家庭学習をきちんと取り組む児童が全校で80%以上だった。 ○4月初めに「家庭学習ノートの手引き」を配布することで、統一した形式で取り組むことができた。 ●家庭学習に取り組むことはできたが、時間は各学年の目標時間に達した児童は、50%程度だった。時間確保をすれば、もう少し内容の充実した学習につながるのではないと思われる。 ○家庭学習ノートについては、ノートに予習をしたり、苦手な単元を復習したりして、自分に合った自主学習ができている子もみられた。 ○「学力向上だより」(八束穂)では、ノーテレビ・ノーゲームの取り組みや早寝の取り組み、家庭学習時間についてアンケート結果をもとにして啓発してきた。 ○ノーテレビ・ノーゲームの取り組みは、6月調査より12月調査の方が向上したクラスが増えた。	・教師自身の授業力の向上を図る研修を実施する。 ・低学年から対話的な学習ができるような指導が必要である。 ・「家庭学習ノートの手引き」についても、来年度も継続して配布する。 ・各学年の家庭学習の内容や目標時間について児童や保護者へ知らせ、保護者の協力を得られるようにして、充実を図る。 ・ノーテレビ・ノーゲームの取り組みについては、「学力向上だより」で知らせ、家庭への啓発を続ける。
		・家庭学習の定着(習慣化)	・「家で宿題をきちんとする」と回答する児童や保護者が80%以上。	・家庭学習定着のため、ドリルや漢字など、繰り返し反復する宿題に加え、発展的内容を含めた課題を出す(宿題の出し方を工夫する)。			

教育活動	○校内研究の充実	・教師の指導技術の向上および指導方法の改善	・校内研究に授業力を磨く場を設定する。 ・職員アンケートにおいて「校内研究の取組はよかった」と80%以上の職員が回答する。 ・「授業づくり1・2・3」の「ステップ3」への到達率80%。	・校内研究に全職員が「スモールトーク」を行い、模擬授業や指導方法、教材分析に関する学ぶ場を位置づけ、指導技術の共有を図る。 ・教師の板書や児童のノートなど、研究通信で定期的に配布し、指導方法、指導技術の共有化に努める。 ・年2回の講師招聘(授業研)による授業研究会と全員授業(グループ研・事前)に取り組む。 ・「授業づくり1・2・3vol.1 & 2」を活用した授業実践を日々行っていく。学習過程に系統性のある学び合い活動を位置づけたモデルを掲示し、実践を図る。月末に振り返りシートを提出し、見直しを図る。	A	○スキルアップ研修会で、指導方法や教材分析に関する実践報告や、日ごろの考えている疑問などを共有し、意見交換することで指導技術を高めようとする意識が高まった。 ○職員アンケートにおいては、94%の職員が「スキルアップ研修会をしてよかった」と回答した。 ○年2回の講師招聘(授業研)による授業研究会と、全員授業に取り組むことができた。 ●教師の板書や児童のノートなどを、研究通信で定期的に配布をしなかった。	・スキルアップ研修の取り組みだけでなく、研究授業や授業研究会の内容などを、研究通信で発信し、職員に共有できるようにする。
						○「授業づくり1・2・3」のチェックシートを作成し、月末に振り返りシートを提出し、見直しを図ることができた。	・チェックシートを活用しながら、日々の授業実践を振り返り、見直しを図っていく。互いの授業実践の良かった点を共有できるよう、全体の振り返りを学力向上コーディネーターがまとめ発信する。

	○読書指導・学校図書館教育の充実	・児童の読書意欲の向上 ・読書活動の推進	・児童一人当たりの年間貸し出し冊数を80冊以上にする(低学年120冊、中学年100冊、高学年80冊以上)。 ・学校アンケートにおいて「毎日読書をする」児童の割合80%以上にする。	・朝の時間(立腰前)に読書を推進する放送を流し、児童に呼びかけ習慣化する。 ・「おすすめの本50冊」を設定し、児童に一定の冊数を読み進めるよう呼びかける。 ・50冊を読み終えると、「読書マイスター」に認定し、氏名を図書館便りで紹介する。さらに各学年の目標冊数に達すると「スーパー読書マイスター」として表彰する。 ・年2回の校内読書週間を設け、重点的に読書を推進し、児童の関心・意欲を高める。	B	○毎朝7時55分に、級外職員に朝読書準備のための音楽を流してもらい、8時からスムーズに朝読書に入ることができた。アンケートで、読書を「毎日している」「ときどきしている」と答えた児童は、89%だった。 ●児童一人当たりの年間貸し出し冊数の達成率は、68%だった。(12月末までの分)低・中・高別の達成率は、低学年100%、中学年59%、高学年57%だった。 ○「おすすめの本50冊」を設定し、カードを配って読み進めるよう呼びかけ、「読書マイスター」や「スーパー読書マイスター」として、図書室入口に掲示し、読書意欲を高めることができた。毎月、「読書のあしあと」に借りた冊数と印象に残った本を記録することで、自分の貸し出し冊数を把握することができた。 ○年2回、校内読書週間を設け、図書委員を中心にイベントを行うことができた。昨年とは違うイベントを行ったので、参加率は高まった。 ●校内読書週間のイベントへの参加は、高学年がやや少なかった。	・全校での読書への取り組みが、学級差が大きいので、意識して呼びかけてもらうように担任に声掛けをする。 ・高学年は、学校図書館以外の本を読んでいる児童も多くみられるので、貸し出し冊数ではなく、読んだ本の冊数を記録する方法なども考える必要がある。 ・校内読書週間のイベントは、毎年続けるものと毎回新しくするものがあった方が、参加率が高いので、全児童が楽しめるようなものを考える必要がある。
--	-------------------------	---------------------------------	---	---	----------	--	---

② あいさつ・返事・はきものそろえの徹底と道徳授業の充実(心の教育)

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	評価	成果(○) と課題 (●)	R2への改善策 (・)
教育活動	●心の教育	・立腰タイムの充実 ・蟻三原則の徹底 ・道徳教育の充実 ・人権教育の充実	・毎朝、全校立腰タイムを履行する。 ・基本的な学習習慣(返事と反応)「元氣よく挨拶できた」と回答する児童を80%以上にする。 ・「靴・トイレのスリッパ並べができる」児童を90%以上にする。 ・「ふれあい道徳」による授業参観率を70%とする。 ・「道徳の授業」が楽しいと回答する児童の割合を70%以上にする。 ・学校アンケートにより、「学校が楽しい」と回答する児童を80%以上にする。	・朝会や集会などで趣意説明を行い、立腰の大切さや効果について、具体的に話し、指導を徹底する。 ・「挨拶・返事・履物そろえ」を合い言葉に、学級経営の柱に掲げ、日常的に継続して指導を行う(児童を見逃さない「教師の目」)。 ・「ちょぼらしゅう隊」の運動等全校をあげて「挨拶運動」に取り組む。 ・靴箱やトイレのスリッパ等、定期的に記録を取り、取り組み達成状況を数値で示す。 ・授業参観で、年1回「ふれあい道徳」を実施し、地域や保護者に公開する。 ・人権集会の実施と学級での振り返り指導を実施する。 ・人権標語に取り組み、集会で発表する。	B	○朝会での全公立腰タイムを行うことができた。 ●集会での全校立腰タイムは行わなかった。 ●立腰タイムを教師が行う趣旨を伝えられず、また、児童への移行時期が遅れてしまった。 ●挨拶・返事・履物そろえの指導が不十分で、児童はよくできていると思っているが、実際はできていない。 ○6月と12月に行った児童アンケートで、「道徳の授業は楽しいですか」という問いについては、「楽しい」「どちらかといえば楽しい」と答えた児童が68.2%から73.4%に増えた。 ●地域住民の参観も含め、ふれあい道徳の保護者の参観率は60.6%だった。 ○事前学習を各学級で取り組んでもらっていたため、高い意識をもって集会に参加することができた。 ●「きらきらカード」の取り組みは、低学年児童にとっては良かったが、高学年になると、書く手間や放送されるかもしれない気恥ずかしさが先に立ってしまい、効果的でなかったように感じた。どの学級も取り組んでいることがわかる手立てや担任の声掛けによる盛り上げ方の工夫も必要だ	・立腰を徹底させるならば、マニュアルを配布し、毎時間学級で行う。 ・「その場で、何度も、しつこくならないように、指導をする」という児童を見逃さない「教師の目」を高めていく。廊下を走る、廊下でボール遊びをする、一輪車の跡片付けなど同様のことであったと考える。 ・校内研修で道徳の授業実践に取り組んできた成果を持続させるためにも、引き続き、児童が「楽しい」と思えるような学習を工夫することを心掛け、実践をしていく。 ・ふれあい道徳の日程を早めに知らせるだけでなく、実施の意図、授業のねらいを伝えるようにする。 ・教師自身の人権に対する学びを来年度の学級づくりに役立てる。 ・学級に配布していた本を1週間に1冊読み聞かせるとか、「人権に関する本を○冊以上読んでみましょう」など、具体的な方策を示しながら人権意識を高める手立てをとる。 ・本年度行ってよかった人権集会に向けての学級の時間を来年度も継続して行えるように、記録を残しておく。
	●いじめの問題への対応	・早期発見・早期対応体制の充実	・毎月你的生活アンケートを行い、いじめや生徒指導上の問題の早期発見に努める。 ・本校の学校いじめ基本方針をいじめの認知・覚知に対する対応マニュアルも含めて見直し、充実させ対応の迅速化を図る。 ・「自分がされていやなことは、人にしない 言わない」の合言葉を周知させる。	・生活アンケートは、毎月実施し子供たちの生活の様子を把握していく。 ・いじめの認知・覚知に対する教職員のハードルを下げるためのマニュアルを作成することで、早期発見ができる体制を作る。 ・全校集会や学級活動、授業の折に触れて話す機会を設け、児童に周知する。 ・道徳の授業を核に、いじめ防止や人権教育を含めた児童の心を耕す授業作りを行う。	B	○生活アンケートを実施し、早期対応をしていただいた。 ●生活アンケートを毎月実施していない。 ○問題行動が起こった時に、どのような体制をとっていくか少しずつ定着してきた。 ○いじめ事案に対し、早期対応できた。保護者や児童の思いを聞いて対応することができた。 ○校長先生の話の後には、必ず「自分がされていやなことは、人にしない 言わない」と伝えていただいた。 ○道徳の授業では、ほとんどの学級で、いじめや人権に関わる内容を複数回扱ったことで、いじめのない学級作りにつなげることができた。	・毎月実施の必要があるか検討し、評価のための評価ではなく、教師が知覚し対応するための機会としてとらえ、アンケートに頼らない方法をとる必要がある。例えば、教師が昼休みに教室だけで過ごしていないか、一部の児童の意見ばかりを聞いていないかなど。 ・知覚した際にまず指導すること、状況を把握することが必要であるが、細部について指導する際は、一度体制を確認してから対応したほうが良いようである。 ・社会でも必要な項目は、蟻として繰り返し指導する必要がある。細かなルールではなく、このような方針について職員が一致して取り組む必要がある。
	○特別支援教育の充実	・一人ひとりの児童のニーズに応える特別支援教育の推進	・支援の必要な児童については、全職員で共通理解する場を毎月1回以上開催し、全職員で支援する体制づくりに努める。 ・特別支援教育に関する研修会を年1回は行い、教師の意識、専門性を向上させる。	・「気になる子」に関する情報交換の場を週1回設け、該当児童の状況について共通理解を図る。 ・特別支援学校の巡回相談員やスクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカーへの相談体制を構築する。 ・ケース会議や職員研修の場を設け、合理的配慮に基づいた指導、インクルーシブ教育の視点に立った対応ができるように環境を整える。	B	○毎週水曜日の会議前には、気になる児童について全職員で共通理解を図る時間をとることができた。 ○担任や保護者の要請を受け、児童観察や検査等を行い、支援や支援体制の見直しへつなげることができた。 ●夏休み前に検査希望の児童が多く、特性傾向の見取りをするのに時間がかかり、保護者への対応がスムーズにできなかった。 ○巡回相談では、担任の要請を受けながら、5回の実施を行った。相談員からの助言を受けながら、学級経営や学習指導へのアドバイスをいただいたり、保護者との相談についてつなげたりすることができた。 ●児童理解については、担任の温度差がある。 ○カウンセラーやソーシャルワーカーと連携することで、家庭や子どものことで悩みを抱える、保護者の心の安定につながった。また、定期的に相談をしていただくことで保護者に安心を持ていただくことができて ○三校合同での職員研修の場が設定された。	・今後も水曜日の会議前には、各学級「気になる児童」の様子を伝える時間を設け、全職員の共通理解を図る。 ・巡回相談を計画的に入れる。 ・スクールソーシャルワーカーやカウンセラーについての情報(来校予定や業務について)職員、保護者へ紹介するなど、積極的に活用できるように工夫を図っていく。

③ 「スポーツチャレンジ」への挑戦(体力向上)							
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	評価	成果(○) と課題 (●)	R2への改善策 (・)
教育活動	●健康・体づくり	・継続的に取り組む運動の定着 ・歯と口の健康づくりの推進	・「スポーツチャレンジ」に各学級1種目以上取り組み、継続的に運動に慣れ親しむ。 ・保健便り等を通して、う歯治療率を50%以上にする。	・「スポーツチャレンジ」を実施期間を設け、全校で継続的に取り組む。定期的に結果を公表し、掲示することで、運動に対する意欲を持続させる。 ・虫歯の放置に伴う悪影響について話し、う歯の治療勧奨を行う。 ・歯科校医と連携しブラッシング指導を行い、自分の歯と口の状態を知り、児童の意識を高める。	B	●体力テストの結果を県平均と比較し、本校の運動能力の傾向を把握することはできたが、学級ごとに授業を工夫したり、改善を図ったりするまでは至らなかった。 ○「外で元氣よく遊ぶ」と回答した児童が、約80%であり、おおむね目標を達成することができた。 ●本校で虫歯のある児童は全体の25.1%であった。夏季休業前に当該保護者へ受診勧告のお知らせを配布し、夏休み前の受診率を報告し、受診のお願いを行ったが、受診率は32.5%であり目標達成することができなかった。 ○6月に「歯と口の健康教室」を、学校歯科医、歯科衛生士によりしていただいた。染めだし液によるブラッシング指導と咀嚼力のテストガムを使用し、歯の健康に関する講話をしていただき、児童にとって興味深い内容で充実した時間になった。	・体育の授業を充実させる。体力テストの分析はもとより、日々の体育指導の在り方、指導方法について、全職員で研修に取り組む必要がある。研修する時間を設けることも必要である。 ・スポーツチャレンジの取り組みについては、体育主任の呼びかけだけでは、なかなか広まらない。スポーツチャレンジ月間などを設け、計画的に進める必要がある。児童の実態に合わせ、全学級が取り組めるように、実施方法について検討する必要がある。 ・う歯治療率については、保健たより等で、受診率の報告を行い、児童の歯の健康についての意識を高めるような掲示物の作成を行う。また、学校歯科医と連携し、日常の中での保健指導に工夫を図っていく。 ・授業参観など、保護者が来校する機会に合わせて、学校歯科医の講話の実施も検討していく。
	○食育の充実と推進	・「早寝・早起き・朝ご飯」運動の推進 ・「食育」についての指導 ・望ましい食生活の習慣育成(生活習慣病の予防)	・保護者アンケートにおいて「早寝・早起き・朝ご飯」実施率を90%以上にする。 ・給食時間の衛生(手洗い・清潔な身なりなど)を徹底する。 ・「給食の時間が楽しい」と回答する児童を80%以上にする。 ・保健便りやアンケートを通して、朝食をとることの大切さの理解と啓発を行い、朝食をとって登校する児童の割合を90%以上にする。	・望ましい生活習慣の定着を図るために、生活習慣カードに、「早寝・早起き・朝ご飯」の項目を設定し、児童、保護者に啓発を図る。 ・学校給食を通して、衛生指導を行い、食に関する意識を高める。 ・献立表や「食育だより」などを通して、望ましい食生活について、児童や保護者へ啓発を図る。 ・啓発活動だけでなく学級活動や保健指導の中で、望ましい食生活について取り上げ指導していく。	B	●11月に実施した県の調査で、「朝食を毎日必ず食べる」と答えた5年児童は約80%にとどまっていた。 ●体調が悪くなり、保健室を利用する児童の中には、夜間遅くまで起きている、朝食を食べていない児童がいる。 ○給食時間の衛生(手洗い、清潔な身なり等)については年間を通して全学級で指導していただいた。また、2学期から各教室に消毒用アルコールを設置し、衛生についての意識を高める効果があったと感じる。 ○今年度の県の調査で、「健康に食事は大切である」と回答した児童が100%を達成した。 ●健康と食の関連についての知識は身につけているので、これを実践に結び付けるための工夫が必要だと考えられる。	・「早寝・早起き・朝ごはん」について学校全体の実態把握や児童・家庭への働きかけのための具体的な手立てを考える。 ・学期に数回、「早寝の日」を設定し、結果を集計する。保健だより等で保護者に対して啓発を図る。 ・児童が、良い生活習慣を送ることができるように日ごろから保健指導を行い、意識を高めていく。 ・教科、特別活動等「食育」の授業を行う際、専門家である栄養教諭が参画することで児童の興味、関心を高めていきたい。さらに、その授業を保護者に参観いただくことで、家庭への啓発の効果も高まると考えられる。 ・食育・健康づくりについて、保健便り、食育便り等での啓発はもちろん、参観日等、保護者へ伝える活動にも力を入れていきたい。
④ 地域の人的、物的資源を活用したふるさと学習の推進(郷土愛・自己形成)							
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	評価	成果(○) と課題 (●)	R2への改善策 (・)
学校運営	○学校経営方針の周知	・学校教育方針、内容の周知を図る	・「ふるさと山内を誇りに思う東っ子の育成」についての認知率を教職員100%、児童90%にする。	・職員には、年度当初の職員会議や連絡会の時間を使い、経営方針について共通理解を図る。 ・児童には、全校朝会や集会等で折に触れ、話をする。校内にも掲示をする。 ・保護者には、PTA総会で学校説明を行う。また、学校便りや各担任からの学級通信、懇談会で周知する。 ・地域には、学校便りや学校ホームページ、各種会合等で説明する。	A	○「ふるさと山内を誇りに思う東っ子の育成」のキャッチコピーは、児童になじみやすかった。「人にされていやなことは、人にしない言わない」の児童の認知率は、約95%であった。全校集会や行事の折に教師が指導をし続けた結果である。「花まるタイム」や「特別の教科道徳」、人権集会など、学校目標に関する具体的指導は、職員一丸となって、年間継続して行うことができた。学級経営目標は、学校目標が反映されたものになっており、PTA総会や学校便り棟で、保護者にも折に触れ周知することができた。 ●児童アンケートにおける、5%が「あまり知らなかった」と回答している。指導の徹底が必要である。 ●地域にむけて、フェイスブックでのお知らせをなかなか発信することができなかった。	・学校目標を合言葉にする。具体的には、全校朝会や児童集会、学年朝会等で口に出して言わせる。また、児童玄関や各教室にスローガンを掲示するなど、目に見える形で児童に周知を行っている。 ・保護者にも同じフレーズで、家庭で指導をしてもらうよう、PTA総会や授業参観、懇談、面談等で積極的に啓発していく。
	○開かれた学校づくり	・コミュニティ・スクールの推進 ・官民一体型学校づくりの推進	・学校運営協議会を年3～4回開催し、出された意見を学校運営に活かしていく。 ・地域へ定期的に情報を発信する。 ・保護者の授業参観や行事参加を80%以上にする。 ・「花まるタイム」「青空教室」等の実践を通して、児童の生きる力を育む。 ・朝の「花まるタイム」への参加率を70%とする。	・各委員から出された意見を学校運営に活かしていく。 ・学校便りを毎月発行する。地域へ回覧し学校の様子を伝える。また、学級通信の発行、学校メールを積極的に活用する。 ・「学校お知らせメール」を活用し、授業参観や育友会行事など、積極的に参加してもらうよう促す。 ・地域や保護者へ割り当て当番表の配布や啓発活動を推進し協力を求めていく。 ・「花まるタイム」への参加を通して、学校の様子や児童の実態を把握してもらうよう努める。	B	○年に3回、学校運営協議会を開き、学校の現状や課題を協議することができた。出された意見は、校長を中心に学校運営に反映させることができた。 ○毎月学校便りを発行したり、学校ホームページを定期的に更新したりするなど、地域に情報発信を定期的に行うことができた。担任も学級通信を定期的に発行し、積極的に情報発信に努めることができた。 ○「学校お知らせメール」を活用し、保護者に定期的にPTA行事や学校行事への参観を呼びかけることができた。 ●体育大会、親子レク行事などは、9割以上の保護者参加率だったが、授業参観の参加率が7割を下回っている。 ●今年度は、PTA除草作業が雨天中止であったため、後日本部役員で行った。次年度はえんきのそちを取る。 ○「花まるタイム」の割り当て表を三ヶ月ごとに更新し、地域協働本部と連携しながら取り組むことができ、保護者にも定着させることができた。地域に学校の現状を公開し、児童の実態を把握してもらうよい機会となった。各クラスにサポータを二人以上は毎回確保することができた。 ●「花まるタイム」は、平日の朝ということもあり、保護者の参加率は平均5割程度にとどまった。家庭事情や仕事の関係で保護者の参加率が伸び悩んだ。地域の参加率は8割以上確保できた。	・地域学校協働本部事業を通して、学校支援に係る組織作りを行い、様々な体験活動を仕組んでいく。「花まるタイム」の年間組織を年度当初に作成し、地域と協力しながら、積極的な参加を呼びかける。 ・学校便りや学級通信、学校HPなどを通じて、地域とタイアップした取り組みや「花まるタイム」の取り組みなどを定期的に地域や保護者に発信し、関心をもってもらうようにする。学級や学年懇談等で、取り組みの様子を動画で流したり、積極的に学校だよりで発信していく。 ・「花まるタイム」の参加率を保護者に公開する。地域や保護者の意識を高めてもらうために、地域行事や学校行事等で折に触れ話をし、取り組みの効果を継続して発信していく。 ・今年度は、「花まるタイム」で感謝の会を1回しか開けなかった。音楽集会には、花まるの地域からの参加が少なかったため、分校感謝の会が開かれているように、全校で地域の方への感謝の気持ちを表す会を特別活動部を中心に企画し、年間計画に位置づける。

教育活動	●志を高める教育	・自ら夢や目標の実現に向け努力する気持ちを高める教育の推進	・「自ら夢や目標の実現に向け努力する気持ちがある」とアンケートで答える児童80%以上。	・授業にキャリア教育の視点を取り入れた年間計画を作成する。 ・道徳や総合的な学習、特別活動を中心に、先人の功績や生き方について考えさせる授業づくりを行い、日本人の気概について学習させる。 ・年間計画にもものづくり体験を位置づける。一流の職人を外部講師に招き、体験活動を通して、将来の職業に対する見方、考え方を児童に学ばせる機会を設定する。 ・山内町出身で、社会に貢献し活躍している人をゲストティーチャーに招き、夢や希望を持つすばらしさについて、話を聞く機会を設ける。 ・高齢者体験、手話体験、車椅子体験等を通して、様々な立場から、生き方について考える機会を設定する。	A	○「自分の夢や目標に向かって努力している」とアンケートで回答した児童が、約90%であった。 ●児童の約1割が「努力していない」と回答している。総合的な学習等で、児童が自分の夢について考える学習が十分でなかったことを示している。 ○道徳の授業では、各学年で「集団や社会との関わりに関する学習」の「伝統と文化の尊重」「国や郷土を愛する態度」について学習をした。 ○4年生で「羊羹づくり」、6年生で「印鑑づくり」を、『ものづくり体験教室』という形で行うことができた。職人さんを外部講師として招き、充実した体験活動を行うことができた。 ○ものづくり体験教室を通して、将来の職業に対する見方、考え方を学ぶ機会を得た。ものづくりの技術だけでなく、話を伺うなかで、マイスターの生き方に対する考えに触れ、自分の生活を振り返る良い機会となった。 ○5年生は、ユニバーサルデザインの出前授業にきてもらい、身近にあるユニバーサルデザインについて考えることができた。 ○5年生は、高齢者疑似体験、車椅子体験を実施し、様々な立場の人の困り感について考えることができた。	・児童が持っている将来の夢について、参考になるような話を聞いたり、体験をしたりする活動を、キャリア教育として、総合学習等に位置付ける。 ・引き続き、『ものづくり体験教室』について職員に周知をし、外部講師として来ていただけるような方に、事前をお願いをする。
		・ふるさと学習の推進 ・地域を生かすカリキュラム ・体験活動等を通した郷土への理解と愛着の深化	・「山内町のことが好き」と回答する児童を90%以上にする。 ・郷土について学ぶ体験活動を授業で積極的に取り入れる。 ・地域の教育資源や地域諸団体の人材等を活用した体験活動を行い、地域と一体となった学校作りに努める。	・各学年の教育課程に、郷土学習を位置づけ、地域・保護者と連携・協力しながら、体験活動を行う。 ・高学年を中心に郷土学習資料や「佐賀語り」などを活用し、生き方について考えさせる場面に授業に取り組む。 ・中学年を中心に「佐賀の七賢人」「山内かるた」について学習し、山内史談会との交流を通して、山内に対する愛着を深める。 ・低学年を中心に昔遊びを通して、黒髪大学との交流を図る。 ・体育大会に山内音頭を取り入れ、婦人会との交流を深める。 ・婦人会による、家庭科ボランティアを積極的に活用し、地域との交流を図る。	B	○「山内町のことが好き」とアンケートで回答した児童が約90%であった。 ●児童の1割が「あまり好きではない」と回答している。総合的な学習や学校行事等で、児童が地域に愛着を持ち誇りに思う学習が十分でなかったことを示している。 ○総合的な学習の時間に、「郷土」についての学習を取り入れ、地域や保護者と連携して学習を進めている。 ○総合的な学習の時間に、「山内かるた」を使った学習を取り入れている。また、山内史談会を招いて、交流・インタビューを行った。 ●「佐賀の七賢人」については、社会科の学習で成富兵庫茂安を取り上げるだけとなった。 ○1、2年生は、黒髪大学との交流で、お年寄りや昔遊びをすることを楽しんだ。 ○黒髪大学との交流会、カルタを通した史談会との交流など、地域の人材をゲストティーチャーとして学校に招き、体験活動をもとに年間通して地域と交流することができた。 ○家庭科のミシンを使う学習で、5年生、6年生で、婦人会の方に家庭科ボランティアとして来ていただいた。個別に児童への対応をすることができ、困ったところを教えてもらい、スムーズに作品作りをすることができた。	・山内町ならではの人の、ものに関する学習を位置づけるために、職員も研修ができるような機会を作る。 ・6年生は「平和」「郷土」を総合的な学習の柱にしているが、年間計画の中で今よりも具体的に計画を立て、地域と連携できるようにしておく必要がある。 ・「佐賀の七賢人」について学習するためには、社会科の授業開始時に一人ずつ取り上げるなどの工夫をするか、総合的な学習の時間のカリキュラムを見直す必要がある。 ・担任が替わっても、地域ボランティアとの取り組みが継続していくように年間計画の中に位置づける。年度末に、担任同士の引継ぎを綿密に行う。 ・「地域人材バンク」を作成し、地域にも配布をする。定期的に地域に協力を求め、地域人材を学校へ呼び込むよう、積極的ににかかわりを持つ。 ・家庭科ボランティアとして婦人会の方が来てくださると、児童への細かい対応ができるので、今後も継続できるように、感謝の気持ちを伝える場などを作って交流を深めることも必要である。
⑤ 「働き方改革」の実現に向けた取り組み							
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	評価	成果(○) と課題 (●)	R2への改善策 (・)
学校運営	●業務改善・教職員の働き方改革の推進	・長時間労働の解消 ・業務改善と環境整備	・一か月の残業時間が80時間以下の教員を100%にする。 ・学校行事や会議の精選効率化を図る。	・管理職は教職員の在勤時間等の実態を正確に把握する。(タイムレコーダーの有効活用) ・職員会議の時間短縮と定刻終了に努める。 ・会議における提案の仕方、資料の作り方、配付仕方など、見直しを図る(無駄なものを省く)。 ・仕事の効率化に向けた取り組みについて、研修会を設け、全員の意識向上を進める。 ・「ノー残業デー」を週一日(金曜日)設け、定時退勤を促す。 ・行事を精選し、次年度の教育課程作りに反映する。 ・校務分掌を見直しを図り、精選する。	A	●年度初めの四月、残業80時間以上勤務した職員が1名いた。 ○タイムカードを導入し、勤務時間に対する職員の意識をたかめることができた。アンケートでは、「有効活用した」と回答した職員は、100%であった。導入後、80時間以上勤務した職員は、5月～1月現在0名である。 ○毎週金曜を定時退勤日に設定し、管理職自ら提示退勤することで、職員への意識付けを行った。 ○校長だよりや教頭通信など、折に触れ「働き方改革」に関する資料を職員に定期的に配布し、仕事に対する意識を改革するよう働きかけた。そのため、6月以降は、月平均45時間を下回っている。繁忙期の4月は52.4時間、5月は、46.2時間であった。 ○職員会議のあり方について、年度当初、職員に提案を行い、校務シェアの有効活用を促したり、資料作成、提案方法など、具体的に指導を行った。その結果、職員会議は一度も時間オーバーをすることなく、45分以内に終了させることができ、効率的な会議を実現することができた。そのため、残りの時間を各自の事務作業にあてることができた。提案資料のペーパレス化にも段階的に取り組み、経費削減、時間短縮に対する職員の意識も高まっている。 ●校外行事に向けた準備、児童への指導など、一部の職員へ負担を強いることになった。学校行事(5名)、校務分掌(3名)が、精選の必要があるとアンケートで回答している。職員が日々多忙を感じていることを示	・県、文科省から配布される資料をもとに、職員へ研修会を開き、意識の向上につとめる。教頭通信を定期的に発行し、意識付けを継続して行う。管理職が、月平均残業45時間を下回る働き方を示し、模範となる。 ・週1回の定時退勤日の達成率を100%にする。段階的に定時退勤日を週2回に増やす。 ・職員会議の提案の仕方、職員の話し方、資料化の仕方など、改善の余地がある。司会(教頭)が具体的に指導を行い、さらに効率的な会議を行うことができるようにする。 ・校務シェアを活用し、ペーパレス化を行い、行事黒板との併用を図る。 ・年度末に四部会で行事の精選案を提出させる。3月の企画委員会で再度行事の精選を図り、教育課程に反映させる。